

スポーツ哲学の先駆者たち (2)

関根 正美

本稿は研究集録147号掲載の「スポーツ哲学の先駆者たち」に続く内容であり、筆者のスポーツ哲学に関する研究計画の一部に位置づけられる。本稿も前稿と同様にスポーツを哲学的に解釈した人物の言説を、H. レンクとの関係を視野に入れつつ論じる。それは、E. ヘリゲル、H. スラッシャー、P. ワイスである。レンクは「武道」それ自体の分析に関心を寄せていた訳ではないが、達成概念と禅哲学を比較する点に関心を寄せている。スラッシャーについては、スポーツの実存主義的解釈の一面生と曖昧さの点から批判される。ワイスとはスポーツを哲学の対象とする事への問題意識を共有していた点が指摘できる。

Keywords : 弓道, 実在主義, 卓越, 哲学史

1. オイゲン・ヘリゲルと弓道

『弓と禅』*Zen in der Kunst des Bogenschiessens* (1948)の著書(本稿では1951年版をテキストとして使用)で知られるヘリゲル(Eigen Herrigel)は、1884年に生まれ、1924年から1929年まで東北帝国大学で教えていた。ヘリゲルはドイツ人であり、東北帝大で教師をした後に1929年以降はドイツのエアランゲン大学で教授職にあった。彼は1913年にハイデルベルク大学で博士の学位を取得している。哲学者としての経歴を見る限りでは、彼は典型的なドイツ哲学の人であり、その哲学には西洋文化が深く浸透していた。その中で禅との出会いは衝撃的であっただろう。厳密に言えば、弓道は武道であってスポーツではない。したがって、スポーツ哲学の系譜として弓道の修行過程を叙述したヘリゲルの著作を取り上げるのは適切ではない。一般的にはスポーツ哲学の系譜と切り離されるべきであっても、ヘリゲルの記述にはスポーツ哲学にとって無視できない思想が含まれている。だからこそ、レンクはヘリゲルに言及するのである。ここではヘリゲルの基本的立場を確認しながら、レンクが注目した点を検討しておきたい。

まずヘリゲルの記述を確認しておこう。ヘリゲルが弓道について理解したことは、日本人の立場で言

えば、さしあたって教科書的なことであった。すなわち、「したがって日本人は弓を射る“術”をば、主に身体的な練習によって多少とも自分の身につけることのできるスポーツ的な技量と解するのではない。それはむしろ、その根源が精神の錬磨の中に求められ、その目標が、精神的な適中、すなわち射手が根本においては自分自身を射るという狙い、そしてその際ついにはおそらく自分自身を射あてるところまで達する適中に在るような技量と解しているのである」(ヘリゲル、稲富・上田訳、1989、p.17)。ヘリゲルの弓道に対する理解は極めてオーソドックスである。彼は阿波師範に弟子入りして、このような理解を得るに至った。阿波師範の道場に掲げてあったと言われる「奥義」をヘリゲルはドイツ語で‘Grosse Lehre des Bogenschiessens’と訳しているが、その「奥義」を彼は次のように解釈している。「それによれば弓道が今も昔も相変わらず生死をかけた重大事であるというのは、それが射手の自己自身との対決であるということと全く同じ意味である。そしてこの対決の仕方は、すりへった付焼刃のようなものではなくて、あらゆる外部に向けられた対決—例えば肉体をもった敵手との一を支え、その根底をなすものなのである。したがって射手の自己自身とのこのような対決の中に、初めて弓道の

秘密の本質が現れる」(ヘリゲル, 稲富・上田訳, 1989, p.19)。ヘリゲルはギリシア, ラテンといった西洋古典語が得意であった。その意味で彼は典型的なドイツの人文学者であった。西洋文化は競争の文化であり, ホメロスに見られるように他者に抜きん出ることを美德とみなす。西洋文化への深い造詣を背景に持つヘリゲルにとって, 他人との競争ではなく自己自身との対決を重視する弓道との出会いは新鮮な驚きであっただろう。

ヘリゲルの禅に対する理解や弓道の修行過程について, 問題点を指摘する研究も現れている。たとえば, 山田は一般に流布されているヘリゲル像とは別の見方を提示している(山田, 2002)。それによると, ヘリゲルは禅の初心者として来日したわけではない。「ヘリゲルは来日以前にハイデルベルクでおおくの日本人と接触し, 禅に関する知識は大峽秀榮と北吟吉から得ていた」(山田, 2002)という。また, この研究ではヘリゲルとナチスとの関わりも指摘されている。ヘリゲルはドイツに帰国後ナチに入党し, エルランゲン学長として地方政治に関わった」(山田, 2002)のである。この時代にナチス関連で大学の学長になったという点で, 何やらハイデggerの辿った道と似ているように思える。もし, 禅への関心と全体主義的時代精神への接近が関係をもつのであれば, それは興味深い研究テーマである。けれどもヘリゲルに関していえば, 禅とナチス入党との関係は定かではない。あるいは両者は全く関係などなく, ただの偶然に過ぎないかもしれない。ヘリゲルにおける禅への傾斜とナチスとの関係は, スポーツ哲学をめぐる文脈でこれ以上立ち入るわけにはゆかない。ヘリゲルが弓道をどのように理解し, そこからレンクが何を読み取ろうとしたかを問題にしなければならない。

ヘリゲルが弓道の精髓を技術や成績ではなく精神性に見出した点は, 当時の弓道理解としては合格点といえるのではないだろうか。彼は, 「弓射はこのようにして, どんな事情の下でも, 弓と矢をもって外面的にはではなくて, 自己自身でもって内面的に何事かを成し遂げるといふ意味を持つのである」(ヘリゲル, 稲富・上田訳, 1989, p.23)と言う。彼は言葉の上でなく, 弓道の修行体験を通して内面的な達成を理解した。あらかじめ禅に関する知識をもって来日したとはいえ, 概念的あるいは観念的に弓道の意味をとらえるのではなく, 身体的な体験を通して理解しようとした点は評価されてよいだろう。

ドイツ人であるヘリゲルが一応の弓道理解に至るには, 葛藤や困難もあった。彼の修行過程で特に興味深いのは, ある段階までヨーロッパとの対比で理

解しようとしている点である。西洋の人間理解は人間を行為の主体として考える点にある。一方で禅は徹底的に主体(自己)の放棄を求める。この峽でヘリゲルは苦闘する。弓道の修行段階において, ヘリゲルは的に矢を適中させようとした。スポーツでは当然の行為である。ヘリゲルは狙い通りに矢を射当てるという意味では, 確実に腕を上げていたようである。

だが, 事件は彼の修行が4年目に入った頃に起る。このころのヘリゲルは技術を磨くことに夢中になっていた。技術を研究することで, 「私は正しい道を歩んでいるに違いないということを急速に確信することができた。ほとんどすべての放れがこの仕方では滑らかにまた気づかぬ中に一と私に思われたのであるが—うまくいった。」(ヘリゲル, 稲富・上田訳, 1989, p.89)。この時期のヘリゲルは自分の上達ぶりについて自身を深めていたようである。ヘリゲルは妻とともに夏休みを浜辺で過ごし, 再び稽古を再開する。夏休み中も彼は技術の研究を怠らなかった。その研究成果を師の前で披露したとき, 事件は起こった。ヘリゲル自身は会心の一本を師の前で披露したと確信する。そして, 「私の第二射は第一射をさらに凌駕したように私には思われた。その時師は無言のまま私に向かって歩みより, 私の手から弓を取り上げて, 私に背を向けたまま, 座布団の上に座った。私は, これが何を意味することになるのか分かったので, 引き下がった。次の日, 小町谷氏は私に, 師範が今後私を教えることを断るといっていると伝えて来た。そのわけは私が彼をだまそうとしていたというのである」(ヘリゲル, 稲富・上田訳, 1989, p.90)。

なんとヘリゲルは, 師に破門に等しいことを宣告されてしまうのである。後に稽古の再開を師から許されることになるが, この一時的な破門はヘリゲルに大きな変化をもたらす。入門してから破門が訪れるまで, ヘリゲルは師が「狙い方」を解説してくれないことに不満を持っていた。師から教えられた「礼法」や呼吸法をもってしては, 満足な適中が不可能であったからだ。ヘリゲルは稽古再開後であっても, そのような「型」というべき作法の指導に納得がいかなかった。そのような時に, ヘリゲルと阿波師範の間で次のようなやりとりが起る。

「このことは私に, 師範がなぜ我々に狙い方を今までまだ少しも説明してくれなかったのかを尋ねる機会を与えた。なんとといっても, 例えば的と矢先との間にはある関係があり, したがって的中を可能にする試験済みの照準というものが在るに違いないと

私は推測したのである。『もちろんそれはあります』師範は答えた。『そしてあなたは必要な狙いどころをたやすく御自分で見付けることができます。しかしそうやってあなたのほとんどすべての射が的にあたるならば、あなたは自分を見世物にしてもよいという曲芸射手に外ならぬのです。自分の中りを数える功名心の強い人には、的は彼がはずたずたに穴をあける一片の反古紙にすぎないのです。弓道の“奥義”はこれを全くの邪道と考えます』(ヘリゲル, 稲富・上田訳, 1989, p.99)。

ヘリゲルが求めていたのは、今で言えば「スポーツ科学的知見」に基づく指導だったのである。彼は蓄積されたデータを基に割り出された的中のための方法があるに違いないと考えていた。現在の常識に照らせば、ヘリゲルでなくともそう考えるだろう。ところが、師匠はいっこうにそれを教えてくれる気配がない。ヘリゲルがついに鬱積した不満を師匠にぶつけてみた場面である。師匠はそれに対して全く違う次元で答える。合理的に的中させることは無意味であるばかりか邪道であるときえ言うのである。ヘリゲルはこの時もまだ釈然としないまま、それでも師匠に従って修行を続ける。そして『弓と禅』のクライマックスともいえる次のような決定的場面を迎えることになるのである。「ある日のこと、私の射が自ら放れていった瞬間に師範は叫んだ、『それが現れました、お辞儀しなさい』と」(ヘリゲル, 稲富・上田訳, 1989, p.107)。最終的には「それ」という得体の知れない境地に至ることになるのだが、ヘリゲルが本当に「それ」を理解したのかどうかは検証できない。テキストを読む限り、ヘリゲル自身も明確な理解に達したというよりも、どちらかといえばお茶を濁した反応をしている。果たしてヘリゲルは「それ」についての明確な理解に達したのだろうか。ヘリゲルの理解は反証不可能なままにとどまっている。だがここで重要なことは、彼の奥義理解を検証することではない。西洋的なスポーツ理解、スポーツ科学的な身体運動の理解とは別の解釈を弓道実践により記述した点に、注目しなければならない。この点が、ヘリゲルをスポーツ哲学の先駆者に呼び入れる理由なのである。

レンクのテキストの中でヘリゲルが最初に登場するのは、おそらく1983年の *Eigenleistung* ではないかと思われる。ここでは第六章の「スポーツと競技における独創的達成」における達成行為の考察でヘリゲルの例が紹介されている。そこでは次のように言われる。「もしかすると、われわれ西洋人は実際に競争による達成をあまりに一面的に培養してきて

いるのではないか。そしてわれわれは他の達成領域、それはたとえば、共同作業やチームワークを強調し、自己体験、自己確証、自己成就、作品の制作、行為の成就あるいは美的体験などを際立たせる類の達成をあまりにも軽視しているのではないか。これについては、ヘリゲルによって書かれた弓道に関する禅哲学の考えがヒントを与えているといえる」(Lenk, 1983, S.58-59)。レンクは「武道」それ自体の分析に関心を寄せているわけではない。ヘリゲルに関しては、西洋的な達成概念の限界を弓道に関する記述から突き止めようとしているのである。

1990年にレンクは日本スポーツ教育学会の記念国際集會に招待され、「禅、フロー経験、瞑想の次元」と題した講演を行うことになっていた。この時レンクはドイツ統一によって生じた役割を果たすために来日できなくなった。東西ドイツの国家システム統合とともに大学も統一されたことにともない、哲学教授任用のための資格審査などに関わっていたためである。この講演プログラムは片岡暁夫筑波大学教授（当時）による代読という形で実行された。ここでレンクは次のように言う。「スポーツにおける禅は非常に流行しており、ヨガの技術はメンタルトレーニングに取り入れられている。禅および座禅つまりフローの技術は、欲求不満を回避する適応の方法として、男女を問わずスポーツ選手に推奨されている。禅の文化は、特にオイゲン・ヘリゲルの先駆的な研究である『弓と禅』以後、伝統的な様式を離れて最新流行のトレーニング法に導入されている」(Lenk, 1990)。

ヘリゲルによって示された弓道の世界は、近代スポーツと異質の世界である。内田樹はヘリゲルが出会った異質の世界の内実を、身体論の観点から解釈している。ヘリゲルの身体は阿波師範が認識した「それ」の出現と同時に変わったのだという。

「無心に繰り返される稽古を通じて、ヘリゲルは『武道的身体』のコードを身体に刷り込むことに成功した。だから阿波師範が言うとおりに、この射にはヘリゲルという個人の運動能力や思索の深さなどは関係していない。射たのは、彼が『それ』への同調に成功したシステムとしての『武道的身体』だからである」(内田, 2007, p.164)。

この内田の解釈で重要なのは、ヘリゲルが本当に禅を理解し弓道の奥義を究めたかどうかではなく、精神と身体的全体的変容を指摘している点である。ヘリゲルが真に禅の理解に至ったか或いは弓道の極意を掴んだかどうかを問題にすれば、それらには確かにある種の疑念や胡散臭さがあるだろう。わずか数年の稽古で師範が免許皆伝するまでに達するとは

思えない。しかもテキストでの表現は「それ (es)」という概念的把握の不可能な曖昧な言い方しかなされていない。内田の解釈に従うならば、ヘリゲルが到達した「それ」は決して禅の奥義でもなく弓道の極意でもない。矛盾する言い方だが、それは純粹に身体論的な精神と呼ぶべきものである。技術的な達人ではなくとも心身一如は可能である。それをヘリゲルの例は教えてくれる。

レンクにとってもヘリゲルの世界は、それまで自分が経験してきたスポーツとは異なる印象を持ったはずである。西洋の科学的トレーニング概念ではとらえることのできない世界がある。それが理解可能かどうかとの問題は残るけれども、新たなスポーツの見方や実践の仕方を発見したことは確かである。スポーツと武道は異なる。けれども禅に関わる考えが人間の身体運動を理解し実践することに果たした役割を考えるならば、そして本書の中心テーマであるレンクからスポーツ哲学を構成する試みに照らし合わせるならば、ヘリゲルの思想をスポーツ哲学の先駆者の一人に並べる理由がある。

2. H. スラッシャーの実存主義

スラッシャー (Slusher, H. S.) は1967年に *Man, Sport and Existence* を表した。1967年当時、彼は南カリフォルニア大学の准教授として体育学を担当していた。スラッシャーの名前は最近のスポーツ思想の流れから忘れ去られた感がある。引用などはほとんど見られなくなった。その理由は実存主義の凋落と無縁ではなかろう。実存主義はサルトルが没してから途絶えた感があり、日本でも死語となりつつある。スラッシャーのスポーツ哲学は実存主義そのものであり、その思想の衰退は実存主義の退潮と関係があると思われる。レンクの言葉を借りれば、スラッシャーの特徴はむしろ個人主義と言った方が適切かもしれない。レンクも1970年代の著作と1990年の講演原稿で批判の対象にしているものの、それ以降ほとんど取り上げていない。けれどもそれは確実に一世を風靡した感がある。事実、トーマス (C. E. Thomas) は、「スラッシャーは、スポーツにおける自由の概念を最初に考察したスポーツ哲学者の一人である」(1983, p.137, 大橋他訳, 1991, p.177) と述べている。レンクにしても批判の対象にするだけの価値を認めており、「スラッシャーの著作はスポーツ活動における個人に関する解釈として意義をもつ」(1979, p.18) と評価している。

レンクによるスラッシャーへのまとまった言及は1972年の *Leistungssport: Ideologie oder Mythos?* (S.101-103) と1979年の *Social Philosophy*

of Athletics (p.15-18), それに加えて1985年の *Die achte Kunst* および1990年の講演原稿 *Zen, the Experience of 'Flow' and the Meditative Dimension in Sport* においてなされている。ただし、批判の内容はかなりの部分が重複している。

まず、レンクが評価する点について指摘しておく。ここで明らかにしておくべきことは、レンクが「スラッシャーの著作はスポーツ活動における個人に関する解釈として意義をもつ」という根拠である。何故に「個人に関する解釈として意義をもつ」のか。スラッシャーの哲学は実存主義であることは間違いないが、形而上学的な議論ばかりを展開しているわけではない。1960年代当時のアメリカスポーツに対する批判も行っている。彼は次のように言う。「アメリカのスポーツは記録、商業価値、大学の「奨学金制度」、名誉、獲得したものなどを強調するなど、いろいろな点でスポーツの実存を著しく身売りしている」(Slusher, 1967, p.12)。これに対し、レンクは「アメリカにおける今日の物質文化すなわち『スーパーマン』文化、記録、数量化、公開性の文化、名誉欲や金品獲得への熱に冒された文化、商業化やナショナリズムなどに特徴づけられる文化に対して、スラッシャーはスポーツがまさに『名誉を汚されている』と述べている」(Lenk, 1972, S.60)。レンクはこのようにスラッシャーの現状批判に同意している。「スポーツをショウビジネスにし、スターを仕立て上げる傾向が強まっていることは疑いえない」(Lenk, 1972, S.60)。これが1960年代から70年代にかけてのスポーツを取り巻く状況である。この頃にスラッシャーとレンクが示した認識、つまりスポーツのショウビジネス化や安易なスター製造という傾向は今日ますます激しくなっているといえる。

プロスポーツはビジネスの世界である。チケットの売り上げやスポンサーからの支援を受けるためにスターを作り上げることも必要である。日本における高校野球あるいは学生スポーツはどうだろうか。春夏の高校野球大会や正月の箱根駅伝などは、ショウビジネス化やスター製造という批判がなされるかもしれない。スポーツ批評の立場では、このような傾向に警鐘を鳴らし、「本来の」学生スポーツの姿に立ち返るべきであるとの主張がなされる。哲学の立場ではどうか。警鐘を鳴らし批判することに加え、あるいはその根拠として「本来のスポーツとは何か」が明らかにされなければならない。ショウビジネス化されたスポーツにも、競技者自身の固有の体験や経験がある。テレビの影響を強く受け、商業主義的色彩が濃くなっていると言われる高校野球にも箱根駅伝にも、選手の実存はある。スポーツ行為

からもたらされる競技者個人の実存を明らかにすることは、まぎれもなくスポーツ哲学の仕事である。スラッシャーが試みたのは、スポーツにおける実践者の内面を明らかにすることだった。スポーツを行う人間は何を考え、何を体験し、何に出会ったのか。

スラッシャーが言っていることは以下のようなことである。「スポーツは日常生活からの逃避以上のものであり、攻撃性を解消するための社会的に望ましい方法以上のものである。スポーツによって存在了解が明らかにされる」(p.4)。「スポーツは実存の挑戦、高いレベルの存在到達への状況をもたらす」(p.12)。「スポーツは人間の基本的実存を露わにする」(p.92)。「人はスポーツや人生において逃げることや自分を欺くことはできない」(p.160)。「スポーツは神秘的な次元での経験をもたらす」(p.114)。これらの言葉からスポーツでの自分の体験や経験を連想することは可能かもしれない。確かにテニスや卓球でマッチポイントを握られたときに、そこから逃げることはできないし代理をたてることもできない。野球で「ボールが止まって見える」と言われることや、ラケットスポーツで「すべてのボールがラケットに吸い込まれて入る」ような経験は、「神秘的な次元での経験」といえるであろう。しかしここには、レンクが指摘するように「実存主義的な術語の空虚さ」(Lenk, 1979, p.18)もまた感じられる。個人の神秘的な体験は、あくまで体験者自身にのみ理解可能であり、広くスポーツ実践者に共通の言語にならないからである。神秘的体験の行き着く先は、せいぜい同じ体験を有する人々による極めて閉鎖的な共同体の形成であろう。秘密結社をイメージさせるこの神秘的体験者の共同体はスポーツがもたらす一つの作用であるが、スポーツを社会から疎外していく要因にもなるだろう。人間が広くスポーツを楽しむ生涯スポーツ社会とは別の社会形成を促す可能性がある。

レンクは実際にスラッシャーをどのような点から批判するのか。重要な点は二つに絞られる。一つはスラッシャーによる実存主義的解釈の表現方法への批判であり、もう一つはスラッシャーの実存主義的解釈にみられる術語の曖昧さと矛盾に対する批判である。

レンクは「実存主義者の哲学は極端に個人主義的である」(Lenk, 1985, S.83)という。そしてスラッシャーをはじめとする実存主義的解釈が、スポーツを実存主義的要素で一方的に塗りつぶしているという。実際にスラッシャーは、スポーツの中で経験される危険、極限状態での選択、勝利や成功の喜びなど、これら実存の特性はスポーツの中でこそ経験可

能であると主張している、スラッシャーは次のように言う。「スポーツは実存を喚起させる」(Slusher, p.12)、「人は死に面するとき、真に生に向かう。スポーツはこの死の直面を人間の自由意志と統制のもとで可能にする。人は死に近づくときに、最も本来的になる」(Slusher, p.206)。スポーツをこのような実存の表現で覆うことで、どのような効果があるのだろうか。レンクによれば実存主義者のおおげさな表現が、「競技者にとってスポーツを人生における特別重要なものと思わせている」(Lenk, 1985, S.82)という。スポーツの中で真の存在が実現するとか、死の危険を特別視して、それをスポーツで経験することが可能であると主張することそのものに、レンクは危険な匂いを嗅ぎ取っている。

果たしてスポーツは、死の危険を冒してまで行う価値のあるものだろうか。スポーツで非業の死を遂げた者は英雄なのだろうか。スポーツの競技行為が直接的に作用し競技中に亡くなったわけではないけれども、「競技を人生における特別重要なもの」と思って自死に至った円谷幸吉の例を、ここで思い出さなければいけぬ。東京オリンピックのマラソンで銅メダルを獲得した円谷幸吉はその4年後、メキシコオリンピックを目指す途上で自ら命を絶った。腰やアキレス腱の故障を抱え、以前の走りができなくなっていた状況での出来事だった。東京オリンピックで日本に希望と喜びを与えた競技者が、再びスタートラインに立つことはなかった。メキシコ大会に向けての期待やプレッシャー、それに応えられない自分との葛藤、そこからもたらされる精神的苦痛などが東京大会銅メダリストから競技ばかりか人生をも奪うことになった。彼の残した遺書がある。「父上様母上様、幸吉は、もうすっかり疲れ切ってしまって走れません、何卒お許し下さい」(橋本, 1999, p.295)。ふつうの人間は走れなくなったからといって自殺までするだろうか。円谷選手にとって、陸上競技が人生における特別重要なものになっていたのである。走れないランナーには死を選ぶことしか残されていなかったのである。2006年10月にレンクが来日したとき、霞ヶ丘の国立競技場にある秩父宮記念スポーツ博物館を一緒に訪れた。レンクはそこで円谷選手のことを知る。オリンピック選手の悲劇はやはりオリンピック選手であったレンクに強い印象を残した。レンクはその後に行った講演の中で、精神的苦痛から自ら死を選んだ選手のことに触れ、スポーツの勝利至上主義やドーピングの問題の解決に向けて哲学の課題を語った(関根他, 2006)。このようなレンクの態度はスポーツの倫理性を重視することから由来するのだが、レンクの倫理学につい

ては別の機会で主題的に論じることにする。

スラッシャーから離れてしまった。話を戻そう。その一方で、スポーツには個人的なかけがえのない、他に置き換えることのできない体験や経験をもたらす機能も否定できない。ここで、われわれはスラッシャーをどのように理解すべきだろうか。スラッシャーは「本書を通じて、私は人間の尊厳という信念を主張したかったのだ」(p.215)という。スラッシャーが描いたスポーツの実存世界は近代科学に彩られた世界観では理解できない世界である。データの結果に基づき、「想定範囲内」での体験を志向する世界ではない。あるいは理性の守備範囲で判断済みの行為を志向するのでもない。もしそのような世界内にとどまるのであれば、誰も死に魅力を感じたりしないだろう。スラッシャーの立場は人間を「ただ在る」という存在の次元ではとらえていないことだと思う。その思想はバタイユの「内的体験」に似ている。バタイユは次のように言っている。「私のいう内的体験とは、通常、神秘的体験と呼ばれているもの、すなわち、恍惚の、法悦の、少なくとも沈思のもたらす感動の状態を意味するものである」(バタイユ, p.19)。神秘的ではあるけれども宗教的な信仰告白に源泉を持たない体験が内的体験である。内的体験は悟性を超えた知の世界である。ここには、スラッシャーにとってのスポーツ体験のように身体知の次元も含まれる。スラッシャーは、概念の枠から逸脱してしまうスポーツの体験を問題にしているのである。

バタイユの内的体験を思い起こさせるスラッシャーの実存哲学は、科学的態度から隔たっている。すなわち、「論理的に証明できるものではないのである。体験を生きなければならぬ」(バタイユ, p.30)。哲学の対象である概念知とも異なる。論文は科学論文であるとの認識が広まっている現在の学的状況の中で、スラッシャーが試みた実存分析の曖昧さや過剰な表現は受け入れられにくいだろう。たとえ実存分析を行うとしても、複数の査読者(読者)が理解可能となる明晰な概念と有効な方法によって説得しなければ、現代の学問状況は研究者によって執筆された文献としての価値は認められない。その意味でスラッシャーの実存主義的分析は、1960年代という時代によって許された試みであると思われる。

スラッシャーによるスポーツの実存分析は、彼の主張によればスポーツの実存分析を通じた人間の探求であったといえるだろう(それが成功しているかどうかは、さらに詳細な検討を必要とするが)。現代においても商業主義や権力との結びつきに基づいたスポーツ否定の言説がある。しかしわれわれは、

競技者のパフォーマンスそのものに感動を覚える。商業主義や権力を競技者のパフォーマンスに読み込む態度は、人間にとって大事なものを見逃しているようにも思える。スラッシャーの実存分析は、それに対するアンチテーゼとしての意味を持つのではないだろうか。

3. 先駆者としてのP. ワイス

レンクは確かにワイスのスポーツ哲学を個人主義であると批判する。その一方でワイスに対して、1979年以降2000年代に至るまで再三にわたって賛美している。レンクの態度には、ワイスに対する最大限の敬意が感じられる。ここではワイスのスポーツ哲学を概観し、レンクとワイスの関わりを考察したい。中心的な論点としては、スポーツ哲学をめぐる二人の問題意識を浮かび上がらせることで、レンクがワイスに共感する点を明らかにしたい。

アメリカの形而上学者ポール・ワイス Paul Weiss(1901~2002)は1969年に、*Sport: a philosophic inquiry* (片岡暁夫訳『スポーツとは何か』不昧堂出版, 1985)と題されたスポーツ哲学の著書を発表した。彼のスポーツ哲学に関する著作のうち日本体育・スポーツ哲学会の学会誌に掲載されたものを除くと、これが翻訳で読める唯一のものである。

ワイスは1901年にニューヨークで生まれ、1929年にハーバード大学より博士号を授与されている。アカデミズムの経歴としてはハーバード大学、エール大学などで教鞭をとり、1962年以降はエール大学の哲学科主任教授を務めた。ワイスの仕事で特筆されるべきものは、パースの著作集を編集したことである。彼はエール大学の哲学教授であり、レンクのように競技経験があったわけではない。「私は競技者ではない。しかしながら私は長年にわたってスポーツについて考え、観戦し、たいしたレベルではないが実際にスポーツをプレイしたこともある」。しかし彼はスポーツに強い関心を持ち、哲学の問題として考察するに値するテーマとの認識のもとに、前記のスポーツ哲学書を書いた。この時点でスポーツの哲学は歴史的観点からも地理的観点からもまだ誕生していない。この企てを行うにあたっての苦労を彼は、次のように述べている。「私はすぐさま、残念ながらコンパスも案内人もなく歩かねばならぬあてどなき砂漠に置かれた状態に気づいた。私は一人で事を進め、全く新たな企ての下で思考を展開しなければならなかった」。この時ワイスは、すでに哲学者とりわけ形而上学者としての確固たる地位を築いている。スポーツを哲学することは、体育関係者でない彼にとって一種の冒険である。そもそも哲学者

がスポーツに関心を寄せて著書を発表すること自体が奇妙な行動であるとさえ言える。彼はなぜ、わざわざ慣れないスポーツを哲学することにしたのだろうか。ワイスはなぜ、どのような点で、スポーツに哲学的な関心を寄せたのだろうか。

実は私も、「スポーツの哲学」という滑稽なテーマを学部学生の時に考えた。スポーツは宗教や芸術、科学などと同じように広く行われ、かつまたそれらと同じくらいスポーツに深く関わっているのではないかと考えたからである。スポーツは人生を狂わすほどの歓喜と落胆をもたらす。スポーツは思念の構成物ではなく、具体的に人間が行為する対象である。スポーツの他にも哲学者に軽視されてきた行為の対象がある。ワイスは次のように述べている。「もちろんスポーツは広く行われているにもかかわらず哲学者に軽視されてきた唯一の活動ではない。セックス、労働、遊戯、そして世俗的な成功は高名な哲学者の注意を引きつけたことがなかった」（Weiss, 1969, p.4）。労働や遊戯については断片的な哲学の著作も現れているが、それらも近代に入ってからである。哲学の根源とされる古代ギリシアにおいて注目されたのではなかった。ワイスは当然のことながら、哲学がスポーツを顧みなかった理由を古代ギリシアに求める。特にアリストテレスに対しては手厳しく批判しており、ギリシアから現在に至るまでの哲学史がスポーツを無視してきたことの主犯格に挙げているほどである。ワイスはアリストテレスの哲学が世俗的な現象を考察の対象としなかったことを批判する。確かにアリストテレスは今日の自然科学から社会科学や人文学に至るまで、広範な著作を残した。しかしスポーツは歴史や宗教とともに学の対象ではなかった。このような哲学的態度は、アリストテレスの影響を受けた後世の思想家たちにも受け継がれているという。ワイスはアリストテレスをはじめとする哲学者たちの傾向を次のように言う。「アリストテレスや他の大思想家たちは、多くの人々が行うことについての構造も理論的解釈も探求しなかった。彼らは大衆的なものは大衆的であるとの理由だけで希有の物事ほどは哲学的に重要でないと、暗黙のうちに考えていたのだ。多くの人々に訴えかけるものは、重要な真理を含み得ないと考えられていた」（Weiss, p.6）。哲学はなにかしら超越的な対象を問題にする。哲学は日常の常識を疑い、思索を通じてあるべき道や姿を求める。古代ギリシアにおいては自然が問題にされ愛や正義が問われたが、それらは少数の市民にとっての問題であっただろう。しかし現代ではそれらの問題は大衆であるところの、われわれ自身の問題である。

「哲学の歴史は、特権を付与された者たちが自分たちの共同体内で了解しようとしてきたことの連続である。なかんずくそれは通常の間人によって流された汗の歴史や普通に日常を生きる歴史を無視している。踊りと歌などは、それらがきちんとした劇場やコンサートホールで上演されるようになって初めて哲学の関心事になったのだ」（Weiss, 1969, pp.6-7）（ちなみに、ここで例に出されている踊りと歌については、英語で‘a song and dance’「おもしろいが真偽の疑わしい話」という表現があり、歴史における歌と踊りの扱いが垣間見える。少なくとも歌と踊りは理性的認識からは遠く隔たった事象であると思われていたのだろう。）

歴史は客観的な出来事を一義的に綴ったものではない。時にそれは権力の側から編集される物語の様相を帯びる。記述された正当な歴史に登場することが許されない人々の生も、歴史の中には確実に存在したはずである。正史に登録されないものを完全に忘却して良いものだろうか。そのような態度は、何か重大なことを見落としているのではないか。ワイスは哲学史に対して批判的な態度を取るわけだが、その不満の矛先は特権や権威を付与された方向からのみ人間の生を扱ってきた歴史に向けられる。人間の生活の実感を捨て去ることのない歴史も書かれてしかるべきである。

従来、正当であると権威づけられてきた営みだけが歴史ではないとの問題意識は、たとえば近年の日本史学における網野善彦に典型的に見られる。また、西洋哲学の歴史に異議を唱えたレヴィナスの思想も、ギリシア以来の西洋哲学史に一種の暴力のにおいを嗅ぎ取ることから形成されている。彼らが行ったことは、あるテーマが歴史や哲学の座に列席するための資格審査の伝統に異議を唱えたことである。それまでの資格審査のあり方とは別の角度から、テーマを呼び起こしたのだった。ワイスが行ったことも、哲学史が行ってきた資格審査にゆさぶりをかけ、普通の人間のありふれた生を支える深層を露にすることだったのである。その結果としてスポーツが姿を現したのではないだろうか。劇場やコンサートホールで披露されるパフォーマンスだけがダンスや歌なのではない。

ワイスは哲学史にスポーツが刻まれることのない理由を次のように述べる。「おそらくギリシアの思想家がスポーツに関する哲学論文を書かなかったのは、競技者によって示される類の体力や調整力をあらゆる人間に備わる能力に過ぎないと考え、したがってそれらを本質的に低俗なものと思っていたからである。彼らの中には、競技者は自

由であるが劣った人間だと述べている者もある」(Weiss, 1969, p.7)。ギリシア哲学は、低俗と見なされる人間の事象には哲学史に参加する資格を与えなかったのである。スポーツはまさにそうであった。ワイスはこのことを批判する。

レンクはカールスルーエ大学の正教授に就任してから3年目の1972年に *Leistungssport: Ideologie oder Mythos?* を著わしているが、その中で次のような疑問を呈している。「しかしなぜに、ギリシアの哲学者たちはスポーツの哲学を明確な形で展開しなかったのだろうか」(Lenk, 1972, S.15-16)。たしかに、ギリシアの哲学者たちは断片的にはあるが身体や競技に関心を寄せていた。プラトンにいたっては当時の傑出したレスラーだったし、ピタゴラスも競技者として名を残している。だがレンクのこのような認識の前提には、当然それらの考察が十分でなかったとの思いがあり、スポーツは哲学の対象ではなかったとの評価がある。スポーツを哲学する営みは中世・近代を通じて、やはり明確に存在したとは言いがたい。少なくとも、スポーツそのものが哲学的思索の対象でありうるとの認識は見られなかった。そのような中、ポール・ワイスが *Sport: a philosophic inquiry* を著す。先に見たように、その中でワイスはレンクによる前述の疑問を先取りし、尚かつ答えを準備していたといえる。

さて、ワイスの問題意識を確認したところで、次にここで述べておかねばならないことは、ワイスのスポーツ哲学において中核となる概念についてである。これについては長年にわたってワイスのスポーツ哲学を研究してきた片岡暁夫が、「ポール・ワイスは、卓越を理解することが人間の特徴であることを、スポーツの哲学的探求の中で明らかにした」(片岡, 1999, p.146) と的確な指摘をしている。

ワイスがスポーツ哲学の中心に置くのは「卓越」の概念である。ワイスは次のように述べる。「卓越は人を興奮させ、畏敬させる。それは喜ばせ、関心を歓喜する」(Weiss, p.3)「他の存在と異なって、私たち人間は卓越を理解する能力を持っている。私たちはそれを成し遂げることを求める」(Weiss, p.3)。この卓越の概念はワイス哲学の中で、スポーツの競技者と結びつけられて考えられている。「競技者は今の自分を満たすために戦う。彼が自分自身になるのは今である。競技者が自分に可能な卓越を求め、それが可能であり実際に得るのは未来ではなく今である」(Weiss, p.11)。「競技者は人間の姿をした卓越である」(Weiss, p.17)。競技者はすばらしい姿をわれわれに示すのであるが、その姿を人間はただ単に鑑賞するだけではない。「競技者はわれ

われを代表することで、われわれすべてを完全なる人間にさせてくれる。われわれはそのような人間が象徴的に成し遂げたことによって、喜ばされざるを得ない」(Weiss, p.17)。ワイスが思索の対象とするのはスポーツ現象の中でも競技であり、競技者の存在である。形而上学者という立場からスポーツを思索する態度が、競技者を通して「卓越」を問うことに表れている。

結局のところ、ワイスをしてスポーツ哲学に向かわしめたものは、哲学の歴史が日常の事柄や普通の人間を取り上げてこなかったことと、スポーツにおける卓越の存在であったといえる。卓越は古代ギリシアの時代から、哲学的探求としてふさわしいテーマなのである。

さて、レンクとワイスには年齢差が34才ある。哲学者として活躍した時期も多少のずれがある。しかし二人の間には明白な交流があった。レンクはスポーツ哲学の著書や論文の中で、しばしばワイスを取り上げる。その取り上げ方には明らかにワイスに対する敬意が感じられる。批判の対象として一刀両断のもとに切って捨てるような扱いは見られない。どの文脈で取り上げるにしても、スポーツ哲学の開拓者であるワイスへの尊敬がにじみ出ているのである。ワイスの方も著書の中にレンクへの献辞を認めている。スポーツ哲学を創造する途上で二人の哲学者を交わらせた背景には、両者の問題意識の交差があったと思われる。それは次のようなワイスの問いに集約される。すなわち、「なぜ、広く行われ、かつ明らかに魅力的なある種の研究対象が偉大な哲学者あるいは思想史に名を残すような思想家によって、発展的に研究されてこなかったのだろうか」(Weiss, p.4)。運動競技という形で古代の思想家たちを实践へと駆り立て、現代において芸術や宗教に匹敵するほどの影響を人間に与えている研究対象がある。スポーツはワイスに哲学への希求を呼び覚ました。ワイスは自分が競技者でないとしても、その呼び声を真面目に聴き取ろうとした。彼はスポーツの哲学をメディアやジャーナリズムの商業主義とは別の場で論じた。スポーツには魅力以上に、ある種の謎がある。謎の存在を明るみに出したという意味で、ワイスはまさにスポーツ哲学の先駆者であるといえるだろう。

4. 結びに代えて

本稿では、スポーツ哲学の先駆者とみなされるヘリゲル、スラッシャー、ワイスについて考察を進めてきた。いずれもレンク哲学の圏内から、その内容を記述することを試みた。この時点で、前回取り上

げた思想家たちを統合した一つの「スポーツ哲学観」を描くのは難しい。ただ、言えることは、スポーツを哲学の対象とする試みがレンク以前に存在したことであり、西洋古典をも含めて考えるならば、スポーツという身体運動を哲学する試みは思想史の中に時折姿を見せていたのである。しかしそれは身体の哲学がそうであったように、正統な思想史に位置づくものではない。たとえ近代スポーツに限定されない身体運動を広く意味するスポーツに関する思索が存在していたにしても、レンクがスポーツ哲学を語る時点では、なおスポーツ哲学史の存在は認められなかったのだろう。先駆者による断片的な思想的記述をもってしては、スポーツ哲学史ないしはスポーツ思想史と呼べる学説史にはならなかったのである。このことが、レンクに個人主義と社会哲学が統合された体系的なスポーツ哲学の確立を要求したのである。先駆者たちの業績が断片的な思想であったことが、レンクをスポーツ哲学に向かわせたのであれば、そのことは皮肉な出来事といえる。ただし、先駆者たちの業績を評価するのとは別に、あるいはそれに立脚した上で、現代の哲学としてレンクのスポーツ哲学をどのように評価すべきかについては、まだなお、考察を重ねてゆかねばならない。

参考文献

- バタイユ, G. (1954) 出口裕弘訳 (1970) 内的体験. 現代思潮社：東京
 橋本克彦 (1999) オリンピックに奪われた命—円谷幸吉三十年目の新証言—. 小学館文庫：東京
 Herrigel, E. (1951). *Zen in der Kunst des*

Bogenschiessens [Zen in the art of Japanese archery]. Bern: Otto Wilhelm Barth Verlag. 稲富栄次郎, 上田武訳 (1989) 弓と禅. 福村出版：東京

- Lenk, H. (1972). *Leistungssport - Ideologie oder Mythos?* Stuttgart: Kohlhammer
 Lenk, H. (1979). *Social Philosophy of Athletics*. Champaign, IL: Stipes
 Lenk, H. (1983). *Eigenleistung*. Osnabrück-Zürich: Interfrom
 Lenk, H. (1985). *Die achte Kunst: Leistungssport — Breitensport*. Osnabrück—Zürich: Interfrom
 片岡暁夫 (1999) 新・体育学の探求. 不昧堂出版：東京
 関根正美・杉山英人・畑孝幸 (2006) オリンピック運動とオリンピック競技者に対するスポーツ哲学の役割. 体育・スポーツ哲学研究. 28-2, pp.111-118.
 Slusher, H.(1967). *Man, Sport and Existence*. Philadelphia: Lea & Febiger
 Thomas, C. E. (1983). *Sport in a philosophic context*. Philadelphia: Lea & Febiger
 内田樹 (2007) 私の身体は頭がいい. 文春文庫：東京
 山田奨治 (2002) オイゲン・ヘリゲルの生涯とナチス—神話としての弓と禅 (2). 日本研究. 24, 201-226.
 Weiss, P. (1969) *Sport: A Philosophic Inquiry*. Carbondale: Southern Illinois University Press

附記：ヘリゲルについては、加賀勝教授より研究情報をご教示いただいた。記して御礼申し上げる次第である。